草野球の思い出

椿　康和

■　広島地区大学教職員軟式野球連盟と広島大学Ｂチーム

草野球といってもピンからキリまで様々ですが、私が所属したのは由緒正しい「広島地区大学教職員軟式野球連盟（以下、連盟）」傘下の広島大学Ｂチーム（通称Ｂチーム）でした。この連盟は、大学紛争が沈静化してきた 1971 年（昭和 46 年）に、広島大学長の故飯島宗一先生の提唱により、地域における大学相互の連携、教職員の体力増強ならびに親睦を図ることを目的として発足しました（写真 1）。発足時の参加大学は、広島大学、近畿大学工学部、広島工業大学、広島商科大学（広島修道大学）、広島電機大学（広島国際学院大学）、広島経済大学、呉高専の７チームでした。その後、1973 年に広島大学が職員のみで構成するＡチームと教員主体のＢチームに分かれ、８チームで各年間７試合（4 月から 10 月まで毎月１試合）を行う形になりました。マスターズ広島の会員で選手登録をされていた方は多くはなく、殆どの方はその存在をご存知ないと思います。私がＢチームに加わったのは 1983 年で、2011 年に引退するまで四半世紀以上（最後の頃は足をもつれさせながら）白球を追いかけていました。



写真１：連盟創立 20 周年記念
パンフレット（1990 年）



写真２：故沖原豊学長（野球部長、前列中央）
を囲んで（1989 年）

連盟には独特のローカル・ルールがありました。それは「一人の投手は１試合では５イニングスまでしか投げてはいけない」、「一度マウンドを降りたら再登板できない」というものです。一般的に軟式野球は投手優位の傾向があります。連

盟のリーグ戦は月に１試合のペースで行われるため、力の突出した１人の投手を擁するチームが、彼を毎試合完投させれば圧倒的に有利になってしまいます。このルールは、親睦を大きな目的とするリーグならではの、チーム戦力の均衡化を図るためのものでした。

■ デビュー戦

法学部・経済学部の教員ソフトボールチーム「ウェンズデー」での働きを評価されたのか、はてまた慢性的な選手不足を補うためか、経済学部の先輩の菅壽一先生や故阪口要先生から、Ｂチームにスカウトされました。それまで軟式野球の経験はほとんど無いものの、ソフトボールではそれなりにプレーしていた私が、最初に当たった壁は「はずむボール」と「スケールの違い」でした。特に後者については、塁間がソフトボールの 1.5 倍になり、打ってはホームから一塁ベースまでが非常に遠くに感じられました。守っては打球の速さと拡大したフィールドの大きさに対応しなければなりません。走塁にせよ守備にせよ、あらゆる局面で、本気で全力疾走しなければならないことを痛感しました。

打者として球速に慣れるために、バッティングセンター通いを始めました。住んでいた千田町からネギ畑に隣接した観音のバッティングセンターまで自転車で往復しました。その後、東広島キャンパスに車で通っていた頃は、帰路に熊野町のバッティングセンターに度々立ち寄って、ストレス解消を図っていました。とはいえ、ソフトボールとのギャップの解消は中々困難で、最後まで引っ張った打球がほとんど打てなかったのが心残りです。

デビュー戦となった近大との試合では、無死一二塁のチャンスに打席が回ってきました。９番打者には当然、バントのサインが出ましたが、１球目、２球目ともに失敗。三塁コーチスボックスで監督のＭ先生が天を仰いでいました。次の３球目は、夢中で振ったバットにボールが当たってくれて奇跡的にライト前で弾む初ヒット。大きく胸をなで下ろしたことを鮮明に覚えています(写真３)。



写真３：デビュー戦にて（1983 年、筆者前列右端）

■ 選手たち

優勝争いの常連であるＡチームや呉高専では野球経験者がそろっており（Ａチームは職員野球部 OB が入会資格)、私学の広島工業大学や広島経済大学では大学野球部で活躍した

学生を卒業時に職員に採用して、戦力強化に余念がありませんでした。それに対し、教員主体のＢチームでは、発足当初は野球経験者の若手を擁して２位という好成績を上げたものの、その後、主力選手の相次ぐ他大学への転出による戦力低下を簡単には補うことができず、低迷が続いていました。そのため、あの手この手で私のような未経験者をも取り込んで、昼休みと試合のない土曜日の午後に、ひたすら特訓を課すしかなかったのです。私が加入した当時は、運営委員で監督代行を務めていた文学部のＨ氏の方針で、練習時間の大半を守備に費やしており、メンバーからは恨みの声も上がっていました。

そんな日々が続く中、ようやく明るい日差しが訪れてきました。1996 年に 23 年ぶりに２位という好成績を挙げたのです。原動力となったのが、その数年前から新たに加入してきた野球経験者達でした。彼らは、プロ野球選手を輩出した大学野球部の出身者（総合科学部のＯ選手）や霞にあった学生の準硬式野球部のエースだった若手（歯学部のＩ選手)、のちに一流のプロ野球選手になった方と高校時代にライバル（自称）だった方（総合科学部のＫ選手）などです。


写真４：カープ調のユニフォーム（1997 年）

その 10 年後の 2006 年に、チーム設立 34 年目にして悲願の初優勝を遂げることができたのですが、私にとっては、1990 年代のこの時期が、我を忘れて草野球を最も楽しめた頃でした。滅多にない長打で出塁したものの、浮かれてしまい隠し球でタッチアウトになったこと、横っ腹にデッドボールを喰らってボールの形をした痣が一週間以上消えなかったこと、急遽監督代行を託された試合で初回に一挙 20 点取られたこと、就学前の我が子達を子守がてら試合に連れて行き、マスコットガール／ボーイとして可愛がっていただいたことなど、思い出は尽きません。

Ｂチームに在籍したことで、ほとんどの学部の先生方と知り合いになることができました。学内で他の学部の方や分野の異なる方と話をする機会が限られていた時代にあって、年齢も専門も異なる仲間たちと共に、フィールドで白球を追い反省会でビールを酌み交わしたことは、大変貴重な経験として、大学生活における様々な局面で私の助けとなりました。また、Ｂチームでは教員以外に数名の職員の方が助っ人として参加していました。その中でも川野保人さんは、30 代半ばで内野手から投手に転身し、多彩な変化球で打者を翻

弄するピッチングで、私と同時に引退するまで長い間マウンドを守っていただきました。そして、記録員をお願いしていた女性職員のＳさんやＮさん、大学院生のＲさん達からは、ベンチから大きな声援と叱咤激励をいただきました（写真２、４、６）。

■　球場

試合会場はチーム間で話し合って確保します。学生野球部用に整備された球場もあれば、消石灰で白線を引いただけの原っぱもありました（これが本当の「草野球」）。東広島市に移転する前に呉市広にあった近畿大学工学部のグランドでは、「その間を抜けたらエンタイトル・ツーベース」、「グランド後方の木立を超えたらホームラン」などのローカル・ルールが適用されていました。Ｂチームの本拠地は、長い間、東広島市の三永水源池に隣接した西条共同研修センター野球場でしたが、世話役の運営委員が学生野球部との取り合いに負けて、代替地を探し回ることも度々でした。その結果、工学部移転後の千田町キャンパスに残っていた、大型船形試験水槽の建物に隣接する空き地（旧工学部グランド）で試合をしたこともあります。

試合会場として最も印象に残っているのが旧広島市民球場です。ここは、その名のとおり、広島カープが遠征に出ている間は市民チームも利用できました。料金はリーズナブルで人気があり、朝早くから順番待ちの行列に並ばないと予約ができませんでした。そんな中、1992年７月のある日、リーグ戦の主管校の尽力で丸１日借り上げて数試合を実施することになり、初めて憧れの地を踏むことができました。ベンチでは、古葉さんはこの位置から戦況を眺めていたのか、などと感慨にひたったものでしたが、残念なことにベンチやロッカールームの設備は、プロ野球の公式戦や日本シリーズの舞台として到底ふさわしいものではなく、新スタジアムの建設が必須であることを痛感しました。それから14年後の2006年９月、幸いにも再び市民球場を借りることができたのですが、当日はあいにくの雨上がり。コンディション維持のためグランドは利用できず、管理者には立ち入りすら禁止され、かろうじてベンチ前で記念写真を撮ることだけが許されました（写真５）。



写真５：旧広島市民球場にて（2006年９月）

一度だけナイターで練習試合をしたことがあります。電気代が結構な金額になるので、照明は内野だけ、しかも半灯という条件で行いました。その結果、外野フライが上がるとどうなるか。上がったボールはカクテル光線から外れて消え、落ちてくるとまた見えてきます。その間、へぼ外野手は、推測した落下点が合っているよう、祈る気持ちで走っていました。

■　ユニフォームと背番号

私が加入した頃のチームのユニフォームはグレーを基調とした地味なものでした（写真２、３）。チームの成績が低迷する中、誰からともなく、ユニフォームを一新して雰囲気を変えようという話が持ち上がり、1990 年代にはセ・リーグ V6 を達成したカープにあやかったユニフォームで戦うことになりました（写真４）。



写真６：2002 年のユニフォーム

ユニフォームの更新は背番号変更のチャンスです。加入時には 28 番だった私は、新ユニフォームでは 11 番を選び、さらに、21 世紀に入って更新したユニフォーム（写真６：これもカープ調）では、42 歳までマウンドに上がっていた大野投手の 24 番を付けました。その番号は現役最後のユニフォームである、広島大学のスクールカラーの緑を基調にしたものに受け継がれました（写真７）。



写真７：引退時（2011 年）のユニフォーム

■　悲願の初優勝、そして引退

21 世紀になると、いくつかの大学では、新規採用者の抑制による教職員の高齢化、女性職員比率の増加、若年教職員の野球離れ等、様々な要因で草野球チームの維持が困難になってきました。広島修道大学が 2002 年シーズン限りで連盟を去ったのに続き、翌年には優勝経験もある広島市立大学が、2005 年には広島国際大学が抜け、2006 年シーズンからは残る 6 チームで戦うことになりました。

残ったチームでも状況は深刻でした。私立大学では週末開催のオープンキャンパスなどの行事が一段と増えてきました。その結果、チーム間での対戦日程の調整が困難になり、試合が組めないのです。全チームが全日程（各チーム５試合、全体で15試合）をシーズン中に終了させることができず、やむなく試合を一部未消化のまま順位が決まるという、昔では考えられない事態が生じてきました。

そこで、Bチームがリーグ戦を主管する当番校となった2006年に、私は試合消化を促すインセンティブとして一計を案じました。それは勝ち点制度の変更です。一般的な勝ち点制では「勝ち2、分け1、負け0」ですが、負けたチームについても試合成立への貢献を評価することにして、それぞれ1を加えて「勝ち3、分け2、負け1」とすることを提案し、他チームも了解していただきました。



写真８：初優勝記念祝賀会（2006年）

この新ルールの効果はてきめんでした。大学行事の影響を受けにくいBチームは、対戦相手のスケジュールにうまく対応して全日程の５試合を消化し、３勝２敗の勝ち点11という結果となりました。これに対し、このシーズン、他のチームは多くて２試合しか消化できず、最大で２勝の勝ち点６に止まったのです。これにより、Bチームは悲願の初優勝を遂げることができ、OBも交えた祝賀会はたいそう盛り上がりました（写真８）。とはいえ、新制度の発案者としては、正直なところ大変複雑な心境だったのです。

勝ち点制度の改定による試合消化インセンティブの効果は限定的で、その後も状況はますます厳しくなっていきました。５年後の2011年には、総試合数を減らして日程調整を容易にすることを目的に、６チーム総当たりのリーグ戦から、３チームずつの２つのリーグ戦プラス順位決定戦の形へと移行しました。

そしてこの年、連盟創設から41年目のシーズン終了時に、私はチーム名を広島大学フェニックスに変えたBチームから引退しました。最終打席では変化球にタイミングがまったく合わず、３球三振の結果でしたが、思い残すことはありませんでした。

末筆ですが、創設当時から長らくチームを率いていただいた小村堯先生（総合科学部）を始めとする諸先輩方、そして、四半世紀を超える在籍期間中に共にプレーした多くのチームメートの皆さんに、改めて感謝申し上げます。